

グランママの微笑／「農家の当たり前」が時代を導く

谷口吉光（秋田県立大学）

「なんでこんな立派な賞をもらえたんだがなあ」

「おらがた当たり前のことをしてるだけなのになあ」

J A秋田やまもとの伝統食名人「グランママシスターズ」たちが、笑顔で話しあっている。場所は大潟村のホテル・サンルーラル大潟の宴会場。今日はJ Aやまもとの食農実践会議が、第1回地産地消優良事例全国表彰で農林水産大臣賞（最優秀賞）を受賞した祝賀会だ。

J Aやまもとは能代山本地区の旧5町村をエリアとする合併農協で、99年に合併して以来、地産地消の活動に力を入れてきた。その取り組みが全国数十の推薦候補から第1等選ばれたことは、同じ秋田県で地産地消に取り組んできた仲間として本当にうれしい。

それではJ Aやまもとの取り組みのどこが優れていたのだろうか。祝賀会で配られた「表彰者の概要」という文書を見ると、「J Aやまもと食農実践会議は地域総ぐるみで、地産地消の幅広い活動をバランスよく実施している」とある。

確かに、旧5町村から各1人ずつグランママシスターズを選んで伝統食の復興と普及に努めたり、「地産地消弁当」や「地産地消おせち料理」を開発したり、若い就農者たちが小学校で子供たちに農業の話をしたりと、ユニークな取り組みを幅広く行っているのは事実だ。また「地域総ぐるみ」という点では、生産者400人、消費者千人、小中学生300人が活動に参加したと書かれている。呼びかける農協に相当の力量と意気込みがなければ達成できない数字だろう。

しかし祝賀会場で「当たり前のことをしてるだけ」という言葉を繰り返しているグランママたちに、受賞の本当の理由は別のところにあると思えてきた。

J Aやまもとの取り組みの大部分は「農家の当たり前」をやっているだけではないだろうか。地元の旬の食材で料理を作る。それを詰めて弁当やおせちを作る。伝統食の作り方を子供や若者に教える。かつてそれらは家族や村のなかで当たり前に行われてきたことだ。近代化のなかで一時「田舎くさい」「遅れている」と軽視されてきたが、もう一度「農家の当たり前」が見直される時期が来たのではないか。

グランママたちのすてきな笑顔を見ていると、こんな想像がまんざら的是ずれではないという気がしてくる。J Aやまもとは「農家の当たり前」を地域全体で楽しく誇りを持って実践し、やっている人が笑い輝いているような光景を作り出した。それが都会からやってきた審査員の心を奪ったのではないだろうか。その背後には、競争と効率に追い立てられて希望を失いつつある日本社会の閉塞感があるように思う。

「農家の当たり前」が時代を導くコンパスになるかもしれない。

（朝日新聞「あきた時評」 2006年4月15日掲載分を加筆・修正した）